九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『和泉式部物語』諸本論の再検討 ： 和歌書式の問題を手がかりに

岡田，貴憲

https://hdl.handle.net/2324/7329571

出版情報：Chuukobungaku. 90, pp.123-137, 2012-11-22. The Association for the Study of Japanese Heian Literature
バージョン：
権利関係：© 2012 Author

KYUSHU UNIVERSITY

『和泉式部物語』諸本論の再検討

――和歌書式の問題を手がかりに――

岡田貴憲

平安期に書かれた日記・物語の現存写本では、通常、散文と和歌との間に一貫した弁別意識が働いている。多くの場合それは、和歌を歌頭で改行し、一字以上の字下げをしてから記していく〝和歌別行書式〟によって体現されており、本稿で扱う『和泉式部物語（日記）』も、ほぼ全ての写本がその書式を採用している。

そうした中、応永本系統に属する宮内庁書陵部蔵桂宮本『和泉式部物語』（図書寮本）においては、作中のある一首のみが、改行・字下げのいずれも施されることなく地の文とまったく同行に続け書きされている箇所があり、問題となる。

本稿では、従来無視に等しい扱いを受けてきたこの問題に際して、平安期における〝和歌同行書式〟使用の可能性に鑑み、和歌の埋没・和歌の混入という二つの痕跡を証拠として、『和泉式部物語』がかつて和歌同行書式で書かれていたことを推定。その痕跡を留める応永本・寛元本が本文面で古態を留めている可能性について論明するとともに、これまで行われてきた『和泉式部物語』の諸本論について再検討を試みる。

一　問題の所在

はじめに、図書寮本より問題箇所を示す。[注1]

【資料1】図書寮本『和泉式部物語』

のし給ふにかくわさとたつね給つらむ
よとおかしうおほえてあふみちは
わすれぬめりと見しほとにせきうちこえ
てとふ人はたれいつかはとのたまはせたるはおほ
ろけにおもひたまえていりしかはとて
　山なからうくはうくとも都えはなにかう
ちての浜を見るへきときこえたる御　（一九オ）

傍線を付した「あふみちは」以下の三十一字について、『和泉式部物語』の他本すべてが改行・字下げを施していることから、これが和歌であると知られる。この箇所について、『古典文庫』[注2]に収録の翻刻では特に断りなく改行・字下げが施されており、全丁の影印を収録した『影印本 和泉式部物語』[注3]は、これを和歌として認めて頭注を付してはいるものの、その書式に

ついては何の言及もない。また、森田兼吉[注4]・由良琢郎[注5]はその書式に触れているものの、ともに和歌が地の文に紛れ込んでいるという事実を確認するに留まっている。

こうした無関心とも言える態度は、この問題が書写者による単純なミスとして認識されてきたことの反映と思しい。「山なから」歌が改行・字下げを施されていることから明らかなように、図書寮本の採る和歌書式は、和歌を改行・二字下げして記す和歌別行書式である。たまたま「あふみちは」歌の一首のみを、書写者が誤って地の文と同行に配してしまったと考えれば、一応の説明は付くのである。また、『和泉式部物語』の研究が三条西家本に偏重しており、他系統本に検証の目が向けられてこなかったことも、その背景として考えられよう。

しかし、現存する平安期の日記・物語が、その成立から近い時期には和歌同行書式で書かれていたという推測に拠った場合、この問題のもつ意味合いは一転することになる。

二　平安期における和歌同行書式使用の可能性

日記・物語中の和歌が地の文と同行に書かれていた可能性は、夙に池田亀鑑によって論じられている。青谿書屋本『土左日記』の書式に対し池田は次のように述べる。[注6]

和歌を本行に書くといふことは古い形式である。院政時代の終頃の書写とおぼしく、世に西行源氏切と称せられてゐる古筆切と同筆にして、我が国に現存する源氏物語中最古の古写本竹河巻（大島雅太郎氏蔵）の中にはこの書き方がしてある。定家が別行にこれを書いたのは、その当時の習慣に従つたからであらう。

紀貫之自筆本の様態を留めるとされる青谿書屋本は、和歌を改行せず、半字から二字分程度の空白を歌頭に置いた上で地の文と同行に記すという書式を採る。現存する大多数の日記・物語写本とは異なるこの書式について「古い形式である」と認め、また紀貫之自筆本の転写本である藤原定家本が和歌を改行していることについて「当時の習慣に従つた」と述べていることから、池田は和歌同行書式を平安期に通行したものとみなしていたことになる。

この池田の見通しについては、これとほぼ重なる結論が田村悦子によって提出されている。[注7]田村は平安期写本の調査を通じて、青谿書屋本における和歌書式の問題を写本全般に通ずる書式の変遷過程の問題へと敷衍し、和歌同行書式が漢籍由来の書式であることを説く。詩と散文とを同行に配する中国正史の書式が日本正史においても採用され、それが仮名散文で踏襲された後、歌頭の空白、改行といった弁別の手続きが産み出されたとする田村の主張は、青谿書屋本の和歌書式を池田の見通しに沿うものとして扱う上で重要な論拠となる。

さらに近年、和歌書式の問題を取り上げた論考が相次いで発表され、[注8]散文中の和歌が地の文と同行に表記されている例についての報告が蓄積されてきている。以下、そうした例のいくつかについて確認を行う。

【資料2】伝西行筆本『源氏物語』竹河巻

して上らうのよみかけたまへる
おりてみはいと、にほひそまさるやと

すこしいろめけむめのはつはなすこし
くちはやしときゝて　よそにみてもきゝ
なりとやさたむらんしたにほゝゑむ花の
しつえをさらはそてふれて心みたまへな

（『天理図書館善本叢書　源氏物語諸本集（二）』一一オ）

作中の全歌を地の文と同行に表記している写本は青谿書屋本『土左日記』のほかに現存しないが、一部の和歌を同行に配する写本は確認されている。その一例が、右に掲出した伝西行筆本『源氏物語』竹河巻である。さきの池田の言にある「我が国に現存する源氏物語中最古の古写本竹河巻」とは他ならぬこの本であり、傍線を付した「おりてみは」「よそにみて」両歌の書き様は、確かに青谿書屋本のそれに酷似している。この伝西行筆本竹河巻においては右掲出箇所のほかに三首が地の文と同行に表記されている。[注9]『源氏物語』の鎌倉期写本では、このほかに伝冷泉為相筆本末摘花巻[注10]において、巻中の四首が地の文と同行に表記された上、歌頭に朱書と思しき合点（一首のみ歌頭に「歌」と記す）が付されているのが確認できる。

こうした歌文同行の表記は、『宇津保物語』の写本においても散見されるものである。

【資料3】俊景本『宇津保物語』初秋巻

いふおりに夕暮になりぬ秋風
いと涼しくふく中将秋風は涼し
くふくをしろたへのなとおまへ
なる筝をかきならしなとす

（『俊景本宇津保物語と研究　第二巻』六五ウ）

『宇津保物語』の伝本中最古の完本とされる前田家本では、複数の巻で地の文と同行に表記された和歌が存する由、『古典文庫』に収録の翻刻に付された注記より確認できる。[注11]うち和歌一首と、右に示した和歌の上句については、俊景本においても同行表記が確認される。[注12]

また『狭衣物語』の写本では、伝為家筆本の巻四、[注13]紅梅文庫本の巻四[注14]が作中の一～二首を地の文と同行に表記している。

【資料4】伝為家筆本『狭衣物語』巻四

のたまへる御ちかひこそかなひかたかりけん
なと人しれすおほしつゝく／ゆめさむる
あか月かたをまちしまに七ゝなぬかにも
やゝすきにけりなとおほしつゝけるひか

（『古典聚英さころも（下）為家本』八一オ～ウ）

『狭衣物語』の例では、いずれも伝冷泉為相筆本『源氏物語』と同様、歌頭に朱書と思しき合点が付されている。

このほか、日記の類にも歌文同行の表記は存在する。『蜻蛉日記』上巻の和歌一首が現存する全写本において、[注15]『枕草子』下巻「細殿に便なき人なむ」段の連歌一首が能因本系統の写本において、[注16]それぞれ地の文と同行に表記されている。

以上が、現在までに確認されている平安期仮名散文における歌文同行表記の例であるが、ここで注目されるのは次の二点である。

まず、『源氏物語』の伝西行筆本竹河巻や伝冷泉為相筆本末摘花巻といった、書写年代が古いと考えられている写本において、特に多くの例が見出される点であるが、この事実は田村の

想定する和歌書式の変遷過程を証するものとみられる。すなわち地の文と同行に記されていた和歌が、時代が下るにつれて改行されてゆく、その過渡期の姿をとどめるのが右の諸例ということになろう。

そしてもう一点は、『蜻蛉日記』の全写本、および『枕草子』の能因本系統に属する写本が、いずれも特定の和歌を地の文と同行に配している点である。このことは、一人の書写者のミスによって和歌が地の文に紛れ込んだのではなく、もともと同行に書かれていた和歌が享受の間見逃されてきたことを示す、一つの証左と言えようか。

冒頭でみた図書寮本『和泉式部物語』の「あふみちは」歌は後者に該当すると思われるが、図書寮本の例は他本に類のない現象であるため、より適切な説明が必要となる。

なお、個々の例についてはより詳細な検討が加えられる必要があり、一部の写本にみられる歌頭の合点の意味など考究すべき課題も多いことは認めねばならない。しかし、これらの例すべてを書写者の単純なミスとして一括りに処理することは、問題の本質を見誤る危険をはらんでいるのではないだろうか。本稿では右のように考え、和歌同行書式が平安期にはたしかに通行していたという前提に立ち、論を進める。

三　和歌同行書式の痕跡①　――和歌の埋没

『和泉式部物語』がかつて和歌同行書式で書かれていたことを推定するための材料として、まずは和歌の地の文化といわれる現象を取り上げる。以下この現象を和歌の埋没と呼称する。

『和泉式部物語』の「九月二十日あまりばかり」条における女の手習文の中には、本来は一首の和歌であったと思しき文字列がみられ、それが全系統の写本に共通して存在することが確認されている。いま三条西家本によって示す。

【資料5】三条西家本『和泉式部日記』

に心くるしけにうちなひきたるには
た、いまもきえぬへき露のわか身そ
あやうく草葉につけてかなしきま、
におくへもいらてやかてはしにふしたれは　（二六ウ）

右の傍線部が本来は和歌であったと推測される背景には、作品内部と外部の二つの徴証がある。

まず、女の消息文には「秋のうちは」「まとろまて」「我ならぬ」「よそにても」の各初句をもつ四首の和歌が記されているが、消息文を受け取った宮からの返歌は「秋のうちは」「きえぬへき」「まとろまて」「我ならぬ」「よそにても」の各初句をもつ五首となっている。宮の返歌はいずれも女の歌の初句をそのまま踏まえたものとなっているが、現状では「きえぬへき」歌にのみ、対応する女の歌がない。そのため、ちょうど「きえぬへき」にはじまる右の傍線部について、本来は和歌であったという判断が可能になる。これが内部徴証である。

次に外部徴証だが、『和泉式部物語』に含まれる和歌の多くは、『和泉式部集』の中に複数の歌群をなして収められている。そのうち、同集後半部を占める歌群中の八八五番から八八九番に、女の手習文にある和歌が並べて収録されており、その中に次の歌が含まれている。

【資料6】榊原本『和泉式部集』

きえぬべき露の我が身はもののみぞあゆふくさばに悲しかりける

（『新編国歌大観CD-ROM版Ver.2』八八六番）

この歌は、右の手習文中の文字列に近似している。また、これが女の歌五首のうちの二番目に置かれていることは、宮の返歌の二首目が「きえぬへき」の初句を持つこととも対応している。さきの文字列が、本来はこの八八六番歌と同形か、それに近い形の和歌であった可能性が認められよう。

これら二つの徴証は、清水文雄・玉井幸助・遠藤嘉基・藤岡忠美・小松登美らの研究によって明らかにされ、[注17] いずれも手習文中の文字列が本来は一首の和歌であったとの結論に到達している。しかし、独立していた和歌が地の文に埋没した理由については、未だ確固たる定説はない。かつては散文中の和歌書式に関する研究が蓄積されておらず、またこうした和歌の埋没が『和泉式部物語』に特有の異例な現象とみられていたためであろう。

然るに現在では、迫徹朗[注18]と青木賜鶴子[注19]の研究により、『和泉式部物語』の和歌埋没に類するとみられる事例が『伊勢物語』および『平仲物語』に確認されている。このことは、和歌埋没という現象が、平安期における和歌同行書式の使用を裏付けるもう一つの証拠である可能性を示唆している。よって、ここで右二作品にみられる和歌埋没の例を確認し、それを明らかにしてゆく。

迫が指摘するのは、『伊勢物語』四六段の次の一節である。

【資料7】学習院大学蔵天福本『伊勢物語』四六段

わすれやし給にけんといたく思ひ
わひてなむ侍世中の人の心は
めかるれはわすれぬへき物にこそ
あめれといへりけれはよみてやる
めかるともおもほえなくにわすらるゝ
時しなけれはおもかけにたつ

（『伊勢物語 天福本』三五オ～ウ）

右の傍線部について、迫は以下の理由を挙げて、これが本来は一首の和歌であった可能性を指摘する。

①「世の中の」以下の傍線部が、三十一文字の体を成していること。

②直後の和歌にある「めかるとも」「わすらるゝ」は、傍線部の「めかるれは」「わすれぬへき」を受けた贈答の表現と考えられること。

③「めかる」という語は、『源氏物語』を除く平安散文にみえないために歌語であると考えられ、『源氏物語』の例もあくまで歌語であることを承知で取り込まれたとみられること。

④『和泉式部物語』に「きえぬへき」歌の埋没がみられ、類例と思しいこと。

この迫の推定については、後に妹尾好信が『伊勢物語』の真名本や古注釈における記述を用いて補強を試みている。[注20]

続いて、青木が指摘する『平仲物語』二段の例を確認する。

【資料8】冷泉為相筆本『平仲物語』二段

けるによしこれもて心さしは見せんとてなとかゝる人目をいかてかはしのふへきつゝむ事たになき身ならはこそあらめ夜あけぬれはおとこかへりていひおこせたり　（『平仲物語　冷泉為相卿筆』八オ）

青木は、右傍線部について、

①傍線部の表記は二字下げではないものの、和歌書式の痕跡を留めているともみえ、また明らかな誤写だけでもおよそ五十例を数えるという底本本文の現状に鑑みると、これが和歌であった可能性を考えてよいこと。

②傍線部を地の文として読んだ場合、続く「夜あけぬれば」という場面転換が唐突に過ぎ、『平仲物語』においては和歌直後の場面転換が数例みられることからも、当該箇所を和歌と捉える方が自然であること。

の二点によって、右傍線部が本来は一首の和歌であった可能性を提示するとともに、その和歌の原形案をも示している。

さきの『和泉式部物語』の「きえぬへき」歌の場合は、内部と外部の二つの徴証によって、原形が一首の和歌であったという推論が補強されるが、これら二例についてはそうした傍証資料が存在しない以上、迫や青木の論はあくまでも推測の域を出ない。しかし、本来は改行・字下げを施されていた和歌が、転写時のミスによって地の文に続けて書かれ、後に改変されたであるとか、あるいは誤写ないし改変によって体裁が崩れたために地の文として処理された、という過程を両例に認めることは、あまり現実的でない。たとえば前者については、詞書に続けて記されかけた和歌が途中で抹消され、別行に書き直されている例が『大斎院前の御集』にあり、[注21] また後者については、そもそも一対の贈答として問題なく成立している和歌を改変する理由が見当たらない上に、誤写によって三十一字を越えるなど破綻した和歌であっても、改行・字下げは保持されている様子が『宇津保物語』『蜻蛉日記』に散見されるのである。[注22] ここではむしろ、本来は和歌同行書式で記されていた和歌が、転写時の誤写ないし改変によって地の文と見分けがつかなくなり、のちに改行されることなく地の文に埋没した、という過程を想定する方が、より合理的と考えられよう。

さて、迫・青木の研究を踏まえ、改めて『和泉式部物語』の「きえぬへき」歌に関する諸説を検討すると、遠藤の『大系』補注と小松の「和泉式部日記私見（二）」が、本稿の目的に近い見解をそれぞれ提出している。まず遠藤の見解を引用する。

（上略）想像するに、原文は

風のくるしげにうちなびきたるにはたゞいまも　きえぬべき露のわが身はもののみぞあゆふくさはに悲しかりけるおくへも入らでやがてはしにふしたれば

とでもあったのではなかろうか。今日、歌は別行に書かれるものと思われているけれども、十六夜日記などの文によってもわかるように、古くは「文の詞につゞけて」歌が書かれていたのである。

遠藤のいう「十六夜日記などの文」とは次の箇所である。

【資料9】伝池田光政筆本『十六夜日記』

はるかなる旅の空おほつかなさにあはれ成事共をかきつゝ

けて

いかはかり子をおもふつるのとひわかれならはぬたひの空になくらん

と文のこと葉につゝけて哥のやうにもあらすかきなし給へる

も人よりはなをさりならすおほゆ御かへりことは

（『影印古典校注叢書4　十六夜日記』一六ウ～一七オ）

これについては「哥のやうにもあらす」とあるので遠藤の解釈には従えないが、遠藤が想定する『和泉式部物語』の原形は、まさに和歌同行書式になっている。『和泉式部物語』がかつて和歌同行書式で書かれていた可能性を初めて提示した点で、遠藤の本文案は画期的と言える。

次に小松の見解である。小松は書式の問題からさらに『和泉式部物語』の成立の問題へと踏み込む。

『日記』は最初の段階において、Aa方式（地の文にそのまま和歌を続け書きにする方式・筆者注）で書かれていたのではないか。（中略）『日記』よりは成立年代が遙かに早く、和歌標示語を用いている土佐日記でさえも、Ab方式（和歌の前に少し空白を置く方式・筆者注）を用いている。（中略）まして、和歌標示語を用いなくなった時代の仮名散文においてはそうであったろう事は、斎宮女御集にわざわざ〈さりげなく……〉と記す点からも推察し得る。しかし、日録や手習の如く草稿的性格の強いものの場合は、和泉式部と同時代及び近接した時代においてもAa方式が用いられていた。

この諸事実の中において考える時、現在の『日記』は、草稿本から出ているのではなかろうか。

小松が参考とする『斎宮女御集』の記述は次の箇所である。

【資料10】西本願寺本三十六人集『斎宮女御集』

（上略）物の心ぼそくおぼえたまひてかきあつめたまへりけるを、とりあやまちたるやうにてまゐらせ給へりける、御かへりどもさりげなくて御ふみの中にあり、内の御かへり

かきたえていくよへぬらむささがにのいとみじかくもおもふべきかな

（『新編国歌大観CD-ROM版Ver.2』一一九番）

小松はこれに加えて、『御堂関白記』をはじめとする変体漢文の和歌書式を根拠とし、現存する『和泉式部物語』は草稿本に発するものであり、ゆえに歌頭に空白を置かない和歌同行書式で書かれていたという。小松と遠藤の見解には多くの相違点があるが、『和泉式部物語』がかつて和歌同行書式で書かれていたという一点は両論共通である。

『和泉式部物語』の原本が草稿本であったか否かは不明と言わざるを得ないものの、両論が想定する原形の和歌書式は、本稿の検討してきた所に照らして妥当と言えよう。

四　和歌同行書式の痕跡②　―和歌の混入

『和泉式部物語』がかつて和歌同行書式で書かれていたことを推定するためのもう一つの材料は、同作品の諸本にみられる、地の文に紛れ込んだ和歌の存在である。以下この現象を和歌の

混入と呼称する。

『和泉式部物語』の諸本四系統のうち寛元本系統と応永本系統に属する写本には、和歌が地の文に混入している箇所が存在することが、小松登美によって指摘されている。[注23] それぞれの箇所で混入の度合いは異なるけれども、本節ではその裏に一貫した論理を見出だすことができると考え、検証を行う。

最初に取り上げるのは、四月晦日から数日後、物詣から帰参した女と宮とが交わす贈答である。

【資料11A】京大本『和泉式部物語』

つらけれとわすれやはするほとふれはいと
恋しきにけふはまけなんあさからぬ心のほ
とをさりともとあれは
まくるともみえぬ物から玉かつらとふ一すち
もたえまかちにてときこえたり宮れいの　（八ウ～九オ）

日頃の間遠さを詫びる宮の「つらけれと」歌に対し、女は「まくるとも」の歌を贈る。右には当該範囲を応永本系統の代表的写本である京大本から示したが、同系統の諸本と混成本系統の諸本、そして三条西家本でも同様に、「まくるとも」歌の頭で改行・字下げがされている。

対して、寛元本系統の諸本は同箇所を次のように表記する。

【資料11B】飛鳥井雅章筆本『和泉式部物語』

すくすをも忘れやすると程ふれはいとこひしさに
けふはまけなむ
あさからぬ心のほとをさりともとみれはまくらも
みえぬものかな玉かつらとふひとすちもたえまかち
にてときこえたり宮例のしのひてわたら　（八ウ～九オ）

傍線で示したように、独立しているはずの和歌が地の文に混入し、代わりに「あさからぬ」以下が女の歌となるように変更されている。他系統本では「あさからぬ」から「さりとも」までが宮の消息文、「とみれは」が地の文であるが、寛元本はそれらを歌句として扱い、逆に他系統本では和歌の一部である「玉かつら」から「たえまかちにて」までを女の消息文としている。だが、「あさからぬ」からを女の歌として読んでみると、宮への返歌としては不自然となるため、寛元本の本文は和歌の改行位置を間違っているものと判断される。

こうしたミスが起こった原因を考えるに、まず明白なのは、「あさからぬ心のほとを」が和歌の初句・二句のように見える点である。そのため、仮に和歌の末尾で地の文を改行している本が親本である場合、書写の段階で「あさからぬ」を歌頭とみなすことは考えられる。だが寛元本系統本は和歌の末尾を地の文へと続け書きにしているので、この場合は成立しない。また、元々京大本のようにあった本文を書写者が恣意的に改変し、改行位置を変更したと想定するにしても、問題なく成立している贈答を不自然な形に作り替える意義は認め難い。

残る可能性が、寛元本系祖本の親本が和歌同行書式で書かれていたために、書写者が和歌の改行位置を誤った、という過程である。他系統本では「まくるとも」とある女の和歌の初句が、寛元本では「まくらも」となっているが、この異同が祖本以前の段階で生じていた場合、「あさからぬ」以下を歌として読んだ方が都合がよい。そうした本文をみた書写者が、歌意の十分

な確認もないまま和歌を誤った位置で改行してしまう可能性は、充分に認められる。あるいは「あさからぬ心のほとを」を歌頭とみなした書写者が、字数の合わない「まくるとも」を誤写と考えて改訂したと考えることもできよう。いずれの場合も、和歌同行書式の本が親本の場合にのみ起こりうる現象と言える。

つまりこの箇所は、寛元本系祖本の親本が和歌同行書式で書かれていたことを現在に伝える痕跡ということになる。

次に、八月晦日頃、野分の雨風に心細く過ごす女のもとに、宮から時節をわきまえた見舞いの歌が届く場面を取り上げる。

【資料12A】飛鳥井雅章筆本『和泉式部物語』

はせたるに日ころのつみゆるしきこえつへし
なけきつゝ秋のみそらをなかむれはくも
うちさはき風そはけしき返事
あきかせはけしき吹たにかなしきにかきくもる
日はいふかたそなきけにさそあらんかしとおほせと
（二六オ）

宮自身の心情を野分の風に託す「なけきつゝ」の歌に、女は「秋風激しき」の隠し題を詠み込んだ「あきかせは」歌で応える。右に示した寛元本系統の諸本と混成本系統の諸本、そして三条西家本では、女の返歌が独立して表記されている。

しかし応永本系統の諸本では、その独立性が失われている。

【資料12B】京大本『和泉式部物語』

もゆるしきこえつへし
なかめつゝ秋のみ空をなかむれは雲う
ちさはき風ははけしきふくたにかなしきに
かきくもる日はいふかたそなきけにさそあ
らんかしとおほせとれいのほとへぬ九月十よ　（二六オ）

女の返歌に該当する部分を傍線で示したが、歌頭にあたる「あきかせはけしき」の部分と、直前の「返事」という地の文が脱落し、歌の残部が地の文に混入している。この脱落は伊藤博が、

「はけしき」と「けしき」という類似の文字列が前後にあるため、目移りにより誤脱したと思われる。

と述べるように、[注24]「あきかせはけしき」と宮の歌にある「風ははけしき」とが類似していることによる目移りとみて間違いないと思われるが、問題となるのはその原因。目移りが生じた原因について伊藤は、

現存応永本（例えば、京都大学文学部蔵本、宮内庁書陵部蔵本）のように、和歌二字さがりで、その結句に本文がつづいている場合は、右のような誤脱をおこす可能性があろう。あるいは、もし桃園文庫所蔵為家本『土佐日記』のように、和歌が本文の中に書かれている本なら、なおのことと思われる。

と述べ、同じく目移りを認める金井利浩は、

（上略）「風ははけしき」と「秋風はけしき」（「けしき」は平仮名表記であったと推測する）とが隣り合っていたことにより目移りが生じ、それが今日に伝えられていると臆測する。

と述べる。[注25] 飛鳥井雅章筆本では「風そはけしき」と「あきかせはけしき」がほぼ同じ高さで隣り合っていることに鑑みれば、

両者の見解は認められるかもしれない。しかし現存諸本について言えば、和歌の場合は改行・字下げという顕著な処置がなされている以上、ごく普通の地の文の場合よりも目移りの可能性が下がるのではないか。むしろ、伊藤の言うように和歌同行書式の本文を想定することで、隣り合う文字列同士の目移りを一般的な誤脱現象として認めることができよう。よってこの箇所は、応永本系祖本の親本が和歌同行書式で書かれていたことの痕跡ということになる。

最後に取り上げるのは、十月中旬、女車を装って昼間に来訪した宮が、女と交わす次の連歌。

【資料13A】三条西家本『和泉式部日記』

るをおらせ給ひてかうらんにをしかゝらせたまひて

ことの葉ふかくなりにけるかな

とのたまはすれは

しら露のはかなくをくとみしほとに

ときこえさするさまなさけなからすをかし（三七オ～ウ）

紅葉の枝を手折り、高欄に寄りかかった宮が「ことの葉ふかく」と下句を詠みかけ、女が「しら露の」と上句を付けたことに興をそそられる場面。三条西家本と混成本系統の諸本では、右のように上句・下句がそれぞれ改行・字下げされている。

ところが、応永本系統の諸本と寛元本系統の飛鳥井雅章筆本・宝玲文庫本では、同箇所を次のように表記する。

【資料13B】京大本『和泉式部物語』

してかうらにをしかゝらせ給て

ことの葉ふかく成にけるかなとのたまはすれはしら露のはかなくをくとみし程にときこえさするほと猶なさけなからすとおほす

（四〇ウ～四一オ）

【資料13C】飛鳥井雅章筆本『和泉式部物語』

かうらんにをしかゝらせ給て葉ことのふかくなりにけるかなとのたまはすれは

白露ははかなくをくとみしかともと聞えさするさまなさけなからすおかしうおほさる宮の（四一オ）

応永本は女の歌、寛元本は宮の歌を、それぞれ地の文に混入している。これらはいずれも三条西家本のように改行・字下げされているのが本来的な形であろう。このことは、作中にあるもう一首の連歌の表記法を確認することでも明らかになる。

【資料14】飛鳥井雅章筆本『和泉式部物語』

うてもものもきこえてつく〳〵となけくけしきを御らんして

なをさりのあらましことによもすからとのたまはすれは

おつる涙はあめとこそふれ御けしきの例よりもうかひたる事ともをのたまはせて

（五二ウ～五三オ）

十一月、霙混じりの雨が降る夜に宮と女が交わす連歌を、寛元本・応永本系統の諸本は、右のように改行・字下げして記している。このほか、十月中旬、初霜が降りた朝に宮が独詠する「妻恋ふと」歌についても、両系統本は改行・字下げして記し

ている。

こうした書写態度に照らしても、連歌の地の文への混入が特異な例であることは明白と言える。

仮に、連歌の両句を改行・字下げしている三条西家本のような写本を祖本として想定した場合、現存応永本・寛元本は、あえて一方の句だけをわざわざ地の文の中に記したことになるが、現実にはそうした処置が行われたとは考えづらい。逆に、前二例と同様、和歌同行書式の祖本を想定すれば、元々地の文と同行に書かれていた連歌を書写者が改行する際、いずれか一方の句の改行を忘り、その状態が現存写本まで伝わってしまった、という理解が可能になる。ゆえに、これらは応永本・寛元本系統の各祖本の親本が、和歌同行書式で書かれていたことを示す痕跡ということになる。

以上の三箇所が『和泉式部物語』における和歌同行書式の痕跡となる。これらを整理することで得られる推論は次の三点。

①【資料12B】【資料13B】の痕跡を応永本系統の現存写本すべてが留めているという事実から、それらが応永本系祖本の時点で存在していたと推測され、同時にその本が和歌改行書式で書かれていたという推測が成り立つ。つまり、応永本系祖本の親本は和歌同行書式で書かれており、それを改行書式に書写する段階で発生したのが、【資料12B】【資料13B】の痕跡ということになる。

②【資料11B】の痕跡を寛元本系統の現存写本すべてが、【資料13C】の痕跡を寛元本系統の有力な二本が留めているという事実から、それらが寛元本系祖本の時点で存在していたと推測される。その本が和歌改行書式であったとみられることは右と同様。よって、寛元本系祖本の親本も和歌同行書式で書かれており、それを改行書式に書写する段階で発生したのが【資料11B】【資料13C】の痕跡ということになる。

③森田兼吉の指摘[注26]によれば、前節で触れた「きえぬへき」歌の埋没現象が全系統の写本にみられることは、それらに共通する祖本（A本）の存在を意味している。前節での検討結果からは、この共通祖本が和歌同行書式かつ「きえぬへき」歌を埋没した様態であったという結論が得られるが、これは右二点の推論によって想定される応永本・寛元本系各祖本の親本の様態と符合する。

つまり、『和泉式部物語』はその成立当初から系統派生後のある段階まで、和歌同行書式の写本によって享受されていたことになり、その古い書式の痕跡を留める寛元本・応永本系統の写本は、本文の面でも古態を留めている可能性が認められるわけである。これまで、三条西家本優勢の陰で寛元本・応永本系統の写本は多くの場合顧みられずにきたわけだが、今後はそうした評価を改めていくことが求められるのではないだろうか。

五　『和泉式部物語』諸本論の再検討

ここまでの検討を踏まえ、あらためて冒頭で示した図書寮本の問題を取り上げる。

『和泉式部物語』の応永本系統に属する写本は、奥書の有無と種類とによって応永奥書本・享禄奥書本・無奥書本の三種に

大別される。このうち無奥書本に該当するのは、親子関係にある島原本・榊原本と、本稿で問題とする図書寮本であるが、吉田幸一はこの三本を「無識語本」という一系統にまとめ、その祖本を「恐らくは早くて中世末期、または近世初頭頃になつてからの伝承書写者による校訂的転写本」とし、さらに図書寮本については「さらに相当念入りな解読的意識の下に、応・享両本により校訂が加へられた転写本であらうと考へるのである」と述べた。(注27)

対して森田兼吉は、「冷泉為尹の奥書という、価値も権威もある奥書を転写の途中で書写しないようなことは考えられ」ないと述べ、(注28)吉田説を批判するとともに、無奥書本を祖本とした新たな系統図を想定する。森田によれば、まず奥書をもたない応永本系統の祖本から現在の図書寮本へと通じる一本が派生し、その後、応永奥書本・享禄奥書本・島原本の三系統が共通する一本から分岐したという。この想定によれば、図書寮本は応永本系統の中でも最も祖本に近い、素性の古い本文を留めている可能性が高いことになる。

そして、この森田の想定は、本稿で問題としてきた和歌書式の面から見たときにも追認される。本稿第三節で確認した和歌の埋没・前節で確認した和歌の混入という和歌同行書式の痕跡は、図書寮本にも当然存在している。さらにこの本は、冒頭でみた「あふみちは」歌の混入を、全写本の中で唯一有している。このことを、『和泉式部物語』がかつて和歌同行書式で書かれていたという、平安期における和歌同行書式の通行という前提に基づく推論に照合すると、図書寮本は近世初期の書写でありながら、同作品中、本文面で最も古態を留めている可能性のある写本ということになるわけである。

森田は図書寮本について、「必らずしも応永本系諸本中の最善本とはいえない」と述べつつも、「他の諸本とはいささか系統を異にし、他の諸本の共通誤謬を正すものをもっている点で、きわめて貴重な本」と評している。寛元本・応永本の系統自体を再評価する必要があると同時に、応永本系統の中での図書寮本の価値についても、森田の言うように引き上げていく必要があろう。

ただし筆者は、これをもって図書寮本を三条西家本に代わる最善本と認めるべきとは考えない。あくまでも、寛元本・応永本系統の写本は決して三条西家本より後代の劣った本ではなく、特に図書寮本がそうであるように、いずれも三条西家本と同程度に古く読解に値する本文を抱えている可能性がある、ということを主張したいのである。

これまで吉田・森田および伊藤博が『和泉式部物語』を対象に行ってきた本文研究は、三条西家本における書写者の添削意識を看破し、この本が最善本とされている現状を批判する一方で、善本主義の枠組みからは外れることなく、常に作者自筆本の面影を追い求めていた。たとえば前節で確認したように、「きえぬへき」歌の全写本における埋没を根拠に全系統に共通する祖本（A本）の存在を推定した森田は、その復元を「『和泉式部日記』本文研究の今日の急務」としていた。(注29)右のような図書寮本に対する高評価も、森田にとっては共通祖本復元のための一手順としてあったということである。図書寮本の扱いで

は森田と軌を異にする吉田もこの方針においては同調していたし、[注30] また共通祖本復元の可能性に懐疑的であった伊藤も、系統の異なる写本に際していずれの本文が原態に近いかの価値判断を行っており、[注31] その方法自体は森田・吉田のそれに通底していた。三条西家本を尊重する高度批判の流れと同工異曲とも言うべきこうした活動の背景には、森田の次の言に象徴される日記文学研究に特有の意識があるとみられる。[注32]

物語であれば、ある時代にそのような形で享受された、ということで、本文の異なるいくつかの写本があっても、それぞれをそのままで尊重するという立場もありうるだろう。しかし、日記文学は特定の作者の自己表白の文学であり、あくまでも作者の真実の声に迫る手立てが求められなければならない。

しかしながら、むしろ中世から近世にかけて広く享受されていたのは、写本として唯一「日記」の題をもつ寛元本・応永本系統の写本の方であった。そこで読まれていたのは〝作者の真実の声〟ではなく、作られた〝物語〟としての『和泉式部物語』であった。そして片岡利博が指摘するように、「物語の本文に関しては原作者の原本文が必ずしも最善本であるとは限らない」[注33] 以上、善本の選定や原型本への遡源といった方法は得策と言えず、明らかに劣悪な改変が加えられている場合を除いて、一定の価値が認められる写本は等しく尊重することが肝要なのである。この事実を受けとめ、本稿で述べてきたように寛元本・応永本への低評価を改めるとともに、これまでの三条西家本に対する依存度を相対的に引き下げることで、近年『源氏物語』や『狭衣物語』を舞台に行われている写本ごとの〝読みの相対化〟という方法を、『和泉式部物語』という〝物語〟に援用するための土壌は整うはずである。

三条西家本に即した読解、および、共通祖本の復元や本文の価値判断といった本文研究によって、この作品の〝日記〟としての一面はかなり明らかにされており、その手法は今後も継続していく必要があろう。しかし同時に、この作品の〝物語〟としての享受の全貌を詳らかにするためには、寛元本・応永本系統の写本の価値を認め、それらを読み解いていく地道な作業が不可欠である。本稿で検討してきた和歌書式の問題はその裏付けの一端に過ぎないけれども、これを契機に『和泉式部物語』の諸本を総体として取りこむ巨視的な研究が進展することを、筆者は期待するものである。

注

1　本稿で掲出した『和泉式部物語（日記）』の本文は、以下の影印に拠った。ただし、傍書については適宜省略した。

図書寮本（宮内庁書陵部蔵桂宮本）…鈴木一雄・伊藤博編『影印本 和泉式部物語』（新典社、一九六八）

京大本（京都大学文学部蔵応永廿一年冷泉為尹奥書本）…京都大学文学部国語学国文学研究室編『応永本和泉式部物語 京都大学蔵』（臨川書店、一九七八）

飛鳥井雅章筆本（東洋大学附属図書館蔵飛鳥井雅章筆寛元四年奥書本）…吉田幸一『和泉式部全集 資料編』（古典文庫、一九六六）

三条西家本（宮内庁書陵部蔵三条西家旧蔵本）…藤岡忠美

編『宮内庁書陵部蔵伝三条西実隆筆 和泉式部日記』（和泉書院、一九八三）

2 鈴木知太郎校訂『和泉式部日記』（古典文庫、一九四八）。

3 注（1）参照。

4 「和泉式部日記応永本系諸本の系譜」（『和泉式部日記論攷』笠間書院、一九七七）。

5 『和泉式部日記全釈』（明治書院、一九九四）。

6 『古典の批判的処置に関する研究 第一部 土佐日記原典の批判的研究』（岩波書店、一九四一）第二章「原本再建のための資料」。

7 「散文（物語・草子類）中における和歌の書式について」（『美術研究』三一七号、一九八一・七）。

8 管見の限りで示すと、小松登美「和泉式部日記私見（二）」（『跡見学園短期大学紀要』一八号、一九八二・三）、鈴木真喜男「行頭のかな」（『いわき明星 文学・語学』二号、一九九二・一二）、今西祐一郎「「私」の位置—土佐日記・かげろふ日記」（久保田淳ほか編『岩波講座日本文学史（二）九・十世紀の文学』岩波書店、一九九六）、田中新一「王朝物語本における和歌書式」（樋口芳麻呂編『王朝和歌と史的展開』笠間書院、一九九七）、今野真二「書記における「行」意識」（『仮名表記論攷』清文堂、二〇〇一）、加藤洋介「大島本源氏物語の本文成立事情」（中古文学会関西部会編『大島本源氏物語の再検討』和泉書院、二〇〇九）、加藤昌嘉「和歌の書記法」（伊井春樹編『日本古典文学研究の新展開』笠間書院、二〇一一）。

9 一六オ「たけかはの」歌、一六ウ「たけかはに」歌、三八オ「たけかはの」歌。

10 『天理図書館善本叢書 源氏物語諸本集（一）』二九ウ「あさひさす」歌、三三オ「からころも」歌、三四オ「なつかしき」歌、三五ウ「あはぬよを」歌。

11 宇津保物語研究会校『宇津保物語 前田本』第三菊の宴巻六三八頁「き、わたり」歌、六五一頁「いにしへの」歌、六六八頁「いりぬへき」歌（本文は「や〳〵とあしひき」以下）、第四あて宮巻六八五頁「ふしまろひ」歌、内侍のかみ巻七八六頁「秋風は」歌、八三〇頁「よそにこそ」歌、八四五頁「松かせの」歌、八五九頁「しほたれて」歌、第六蔵開下巻一二一〇頁「よろつ代の」歌。以上の和歌について「コノ歌底本デハ本文中ニ書キツヅケテアル」等の注記がある。

12 掲出箇所のほかに、きくの宴巻八九ウ「いりぬへき」歌（本文は「や〳〵とあしひき」以下）。

13 掲出箇所のほかに、一六八ウ「ひとしれぬ」歌。

14 『狭衣物語諸本集成 第5巻』六〇オ「こいもせぬ」歌。『狭衣物語』の和歌表記例については須藤圭氏より教示を受けた。

15 『笠間影印叢刊 桂宮本蜻蛉日記〈上〉宮内庁書陵部蔵』五七～五八頁「世中を」歌。なお玉上琢弥・柿本奨『蜻蛉日記 本文篇』（古典文庫、一九六一）参照。

16 『笠間影印叢刊 能因本枕草子〈下〉学習院大学蔵』一一九～一二〇頁「みかさ山」「雨ならぬ」歌。

17 清水文雄「和泉式部集の歌と和泉式部日記」（『文学』一八号、一九三二・一一）、玉井幸助「和泉式部日記中の五首贈答歌」（『文学』二一—一号、一九三四・一）、遠藤嘉基『日本古典文学大系 和泉式部日記』（岩波書店、一九五七）、藤岡忠美『日本古典文学全集 和泉式部日記』（小学館、一九七二）、小松登美注（8）論文。

18 「歌のゆくえ—伊勢物語四十六段をめぐって—」（『尚絅大学研究紀要』一七号、一九九四・三）。
19 「平中物語第二段の和歌—歌物語の場面性など—」（『百舌鳥国文』一六号、二〇〇五・三）。
20 「「世の中の人の心は目かるれば……」追考—『伊勢物語』第四六段 贈答歌の痕跡—」（『古代中世国文学』七号、一九九五・八）。
21 『笠間影印叢刊 大斎院前の御集 日本大学図書館蔵』一五五頁「さかりなる」歌。また加藤昌嘉注（8）論文によれば、天理図書館蔵国冬本『源氏物語』匂宮巻（中身は夕霧巻後半）の「ふるゝ身は」歌が、直前の地の文に一旦続けて書かれた後、途中で擦り消され、別行に書き直されているのが確認されるという。
22 任意の一例を示すと、宇津保物語研究会校『宇津保物語 前田本』第三菊の宴巻六六八頁「露霜の」歌（上句「おとなしものをすかりならせとも」とある）、『笠間影印叢刊 桂宮本蜻蛉日記〈上〉宮内庁書陵部蔵』五八頁「おくれしと」歌（二句「うきうきみさゝきに」とある）。
23 小松注（8）論文。
24 『和泉式部日記伝本攷』（桜楓社、一九八一）第三章「三条西本と応永本」。
25 「和泉式部日記応永本系統本本文整定の試み（中）」（『中央大学国文』三三号、一九九〇・三）。
26 「和泉式部日記三系統本の性格 序説」（『國學院雑誌』六二—六号、一九六一・六）。
27 『和泉式部研究 一』（古典文庫、一九六四）第二章「和泉式部日記諸本の性格と伝写系統」。
28 注（4）参照。
29 「『和泉式部日記』三系統本論再説」（國學院大學院友学術振興会編『新国学の諸相』おうふう、一九九六）。
30 注（27）書第三章「原典への復原の問題と三系統本の祖本ならびに別本の想定」。
31 注（24）書序章「和泉式部日記諸本の系統」。
32 「『和泉式部日記』は三条西家本だけでは読めない—三系統本論の性格再説・続稿—」（『日本文学研究（梅光女学院大学）』三一号、一九九六・一）。
33 「物語異文の形態学的研究序説—『狭衣物語』における筑前と長門の混乱について—」（『文林』二七号、一九九三・三）。

【付記】本稿は、二〇一一年度中古文学会秋季大会（一一月一九・二〇日、於愛知淑徳大学星が丘キャンパス）における、同題の口頭発表の内容に加筆の上活字化したものである。